

工房プリズム オリジナル

藍染セット



Ver. 1.2: 2023年12月12日



使用上の注意

以下を確実に読んでください。

(1) どの内容物も、人が口に入れること、あるいは他の食品と共に口にすることは絶対にしないでください。乳幼児などが誤って口に入れないように、手の届かない場所におくなど、十分に注意してください。

(2) 同封の各種粉末や、それを溶かした液体は、直接手で触らずに手袋を用いて扱うこと。皮膚に付着した場合は、適宜せっけん等で洗い流してください。目に入った場合は、水で洗い流し、症状等が回復しない場合は、医師の診察を受けてください。

(3) ハイドロサルファイト（袋C、別名ハイドロコンク）は染色用還元剤、抜染剤、漂白剤で用いられているものです。保管は、日陰の涼しいところにしてください。

皮膚および目に対する影響以外に、健康に対する影響は確認されていないのですが（※）、使用時に異常を感じた場合は直ちに使用を中止してください。

長い時間未使用にすると、酸化して、還元剤としての効力を失います。

毒物劇物ではありませんが、環境に直接放出したときに、生物に影響を与える可能性は否定できませんから、充分うすめて下水等に放出することが望ましいです。

（※） <https://www.nite.go.jp/chem/ghs/m-nite-7775-14-6.html>



内容材料

藍液 5ℓ (5000cc) を作るための材料です。

1. 藍 (袋 A、10g)

インド産のインディゴケーキを粉末化しています。インディゴケーキとは、植物の藍を粉碎しそこから染料としてのインディゴを抽出し、固めたものです。

2. ソーダ灰 (袋 B、100g)

水質をアルカリ性にするために使われます。

3. ハイドロサルファイト (袋 C、25g)

インディゴはそのままでは、繊維を染める力を持っていません。還元された物質にして染料に変えます。そのため材料です。漂白剤にも使われる薬品ですから、充分注意して扱ってください。

用意するもの

- 5リットルの水が余裕を持って入るバケツなど。実質これが染める材料を浸す「藍甕」になります。
- 上記の水は、可能な限り 25℃～35℃程度の温度があることが望ましいです。冷たいとやや溶けにくいです。
- 手袋。水が浸透しないものにしてください。粉末や液を直接触るときは、常に手袋を装着して作業をしてください。作られた藍の液を直接触ると、染料が手や爪についてとれにくくなったり、手が荒れる原因になります。
- 染める素材。綿 100%の布地のものにしてください。綿以外のもの含まれると（化繊の糸など）、その部分が染まらなくなります。その他どのような材料が染まるかは、自分の体験とインターネット上の知識で補ってください。
- 藍の状態を確認するための白い綿の端切れなど。
- バケツの液をかき混ぜるもの。

藍液の作成手順

還元された藍の液を作成することを「藍を建てる」と言います。使用するインディゴは自然素材のものですが、還元剤を用いるので、化学建てともいわれます。

およその作成手順を説明します。

必要に応じて動画 (youtube) も参考にしてください。より詳細に説明しています。(三つの動画になっています)



藍染は、温度や材料のばらつき、素材の材質や状態など多様な要因によって影響され変化します。ご自身で液や素材の状態を見ながら判断してください。

- 手袋 (水を通さないもの) を装着する。
- ソーダ灰 (袋 B) 全部をバケツの液に加える。ゆっくり混ぜる。液に空気が混ざるほどの強さでは混ぜないこと。
- ソーダ灰が溶けたのを確認したのち、還元剤ハイドロサルファイト (袋 C) を液に加える。慎重に、ゆっくり混ぜる。これ以降、泡立つほどに液をいじることのないように充分注意する (液の染める力が弱まる)。腐敗臭に似た匂いが少しする。
- 還元剤が溶けたのを確認し、インディゴ粉末 (袋 A) を加える。棒などを使ってゆっくりとかき混ぜる。強くかき混ぜると、液の中に空気が入って、あとで還元剤を混ぜたときに、液の中に残っている空気と反応して、還元する力が弱くなる。

5. インディゴケーキ粉末は溶けにくいので、一時間程度放置する。ただし、溶け残りが発生する可能性があるので、空気が液に入り込まないように、合間にゆっくり混ぜても良い。

6. 綿の端切れをゆっくり液につけてみる。緑色に着色するのを確認。ただし、これは端切れの布が藍に染まったということではない。インディゴが溶けきっていないと、色が薄くなる。

7. 染める対象の素材を20分程度藍液に浸す。浸す時間は、絞りの有る無し、生地の状態に依存する。

シワは染めむらになる可能性があるので、注意する。液が布地に浸透する時間を考慮してつける。布地をもむことで、浸透する時間は水かくなるが、絞りがある場合など、それが適切かどうかは自分で判断する。したがって、時間の長短は一概に言えない。薄手の生地で絞りなどなければ、数分で良いかもしれない。

8. 引き上げると素材は濃い緑になっている。その状態では充分染まっていない。それを空気にさらして酸化させ、青くなった状態で初めて染まったと言える。ただし、あくまで布地に浸透したインディゴが酸化して染まるのであって、浸透せずに表面ついているだけの液が酸化しても、それは染まったものではないので、最後に洗い流されなければならない。

9. 15分から30分、空気に晒すと空気に触れている部分の酸化は完了するはずである。必要な部分がしっかり藍色になっているかどうかを確認する。

11. 濃く染め上げたいのであれば、素材を浸して酸化するという過程をくりかえす。回数が多ければ、より濃く染まるが、色落ち色移りの可能性も高まるので、それを回避する特別な処置も必要になる。

12. 素材を水で洗う。最初は、布に浸透しないまま酸化した藍の液で水が青くなるが、数回繰り返すと染まっている部分は変わらずに、洗いの水は透明に近くなってくる。

13. 途中、熱めのお湯で洗ったりすることも有効。

14. 素材を乾燥させれば、染め自体は終わる。弱めにアイロンをかけることもできる。

15. 他に染めるものがなければ、なるべく水で薄めてバケツの液を下水に流す。直接用水などに流すことは、なるべく避けるべきだ。インディゴそのものではなく、ハイドロサルファイトが含まれている。これは全く人以外の生物に影響を与えないとは言い切れない。浄化槽の仕様を確認した上で、浄化槽を通した方が望ましい。この辺りは自己責任でお願いしたい。

16. 他に染めるものがある場合は、端切れを浸して、引き続き濃い緑になるかどうかを確認して、上記を繰り返す。

残った藍液について

使用後の藍液は、インディゴの濃さと還元度合いによって評価できる。布地を染めたことによって、インディゴの含有量が低下して薄くなってしまえば、染めることは困難になる。それを回復させるためには、インディゴの追加が必要になる。

一方、インディゴの含有量がある程度認められても、それが還元された状態になっていなければ、液の染める力がなくなっている。この場合は、ハイドロサルファイトを追加することによって還元力を回復することができる。

不明な点

不明な点があれば、工房プリズムまで遠慮なく問い合わせてください。

工房プリズムについて

工房プリズム

創業：2023年4月

所在地：千葉県大網白里市下ヶ傍示3-1

責任者：鷺田豊明

メール：toyoaki@washida.net

電話番号：070-5640-9641

ウェブサイト：<http://mp-prism.com>（「問い合わせ」ページあり）



（参考）

https://www.jstage.jst.go.jp/article/kakyoshi/64/8/64_406/_pdf

